



2007年

SORA 18号

晴
夜

(18)

—
1

柴
田
佐
知
子

病
む
母
が
山
焼
く
こ
ろ
と
言
ひ
に
け
り

棟
上
げ
の
ど
の
柱
に
も
春
の
風

鶯や土蔵あちこち欠けてをり

波打てる阿蘇の大地を焼きにけり

山焼の窪みより火の走り出づ

春の夜や頭丸めて済むことも

神将のみんな怒つて桜かな

―「俳句朝日」五月号より―

花 母

高 倉 和 子

波の音立てて若布を洗ひけり

春焚火終りは足で均したる

臃かな旅行鞆のふくらみも

時間割大きく貼りてチューリップ

人間のうろうろしたる春の山

家中を拭き上げ風の光りけり

左谷山 建正寺

紅白の餅や野菜や春祭



花御堂色とりどりの子が押せり

甘茶仏花の匂ひもしてゐたり

手水場に洗ふ湯呑みや春祭

ゆつくりと雨の上がりしさくらかな

花筏大きくなりて色深む

少しで足る母の暮しや花苺

頭より走りてゐたる羽拔鶏

青々と山の座れる筑後川

夏富士

中田みなみ

花吹雪乾門^{いぬい}より妃の車

内股に亡母来る九段花ざかり

てふてふや光を入れぬ埴輪の目

順礼の鈴音また来る岩たばこ

花櫛午後は日蔭る御師の家

夜鳴き鶏一羽二羽三羽遠雪崩



別れ雪匂ふ立入禁止札

逃水に漂ふひとを宥しけり

笹百合にけふは冷たき峡の雨

伐り株の人待つごとし山開き

人待ちの顔を実梅に移しけり

柿若葉敷布・エプロン糊効かし

人造の地の果てに海朝ぐもり

踏切りの開き夕焼終りけり

募金箱コトリ銀座の夜のみどり

森のやうに

荒井千佐代

火入れ待つ素地の匂へり春の雪
反り返るもの如月の炎の中に
春一番をみな羽化のはじまれり
公園に移動図書館地虫出づ
病児保育早春の海見える部屋
パンジーや眉間に皺をよせないで



老人も嬰もゐる家つばめ来る

眼の力抜けば涙や花貝母

復活祭パセリを森のやうに盛り

蠅^{うま}生る聖書と医書のはざまにて

お干菓子で茶毘の順待つ花の雨

さくら桜ちちははの骨細りゆく

紋白蝶汚れてをれば生き易し

みどりの日釣りの残り餌稚魚に撒き

オムレツの黄を濃く春を逝かせけり

空作品抄

柴田佐知子

募金箱コトリ銀座の夜のみどり

中田みなみ

俳人は句材を農村や山海に求めがちであるが、都会には都会の詩情があると思う。街に暮らす者は、その街で詠み、みなみさんのように自分の足元の俳句領域も広げてゆきたいものである。

掲句は銀座の夜。募金箱に落ちる硬貨の音のあと、銀座の並木の緑へと視線が導かれ一気に都会の夜の景へとひろがる。「コトリ」のあとの軽い間がいい。「夜のみどり」の季感は句い立つような青葉の候だと思う。都会の詩情豊かな作品である

毒草も毒消し草も春の山

服部 早苗

狐の牡丹・座禅草・蝮蛇草などの毒草が春の山中にある。そして毒消し草も。座五にはそれらをすべて収め、茫と霞む春の山が据えられている。助詞の「も」は遣い方によつては安易に流れた句柄となってしまうこともあるが、ここでは「も」の重なりが歌うような調べとなり春の情感をかもし出している。

墓山に細る束子や百千鳥

樋口みのぶ

墓石を洗う束子であろう。私も墓石の裏などに置いてあるのを見かけることがある。モノをしつかりと捉えることで、墓を守る人も見えてくる。モノで表現する強さである。

せつかちな父見失ふ苗木市

あさなが捷

魚屋が持つていきなと海酸漿

小林 朱夏

一句目、苗木市に行ってもいつものせつかちな父なのである。父の背中を見失った作者の姿も楽しい。二句目は「持つていきな」という魚屋の声をそのまま作品化した勢いが句の眼目である。

よく笑ひよく走る子や入学す

苑 実耶

霊や足腰弱き友ばかり

高倉恵美子

一句目は、入学の子への慈しみの情溢れる素直な作品。二句目は嘆息のごとき句なのだが、「足腰弱き」とのストレートな表現で可笑しみが加わっている。

あぢさゐは怪しきものよ夢に似て

星原 悦子

紫陽花に向き合った一物仕立の句。紫陽花も年毎に新種が生まれ、私も美しい色に惹かれて今年一株買った。紫陽花は大きな色のかたまりなのだが、華やかというイ

メージはあまりない。なればどのような花か、と問われ
たならば、これからは「怪しきものよ」という悦子さん
の句を思い出しそうである。たたみかけた「夢に似て」
の感覚にも共鳴する。

亡き母とともに雛を飾りけり

青木 朋子

「空」で連載中の「季節の詩歌」を執筆する青木朋子
さんは短歌の作家で、十五歳の時に母上を亡くされ、そ
の喪失感から長い間抜け出せなかったといわれる。周り
のあたたかい人々や本や自然によつてやつと「再生」を
果たされたそう。だ。「大空の亀」という名で書かれた青木
さんのブログを開くと「母を亡くして四十年経った今、
五十首の連作という形にすることが出来た」とある。歌
誌「塔」にも二十首掲載されているが、その中から三首
抽いてみる。へ人のまへ涙流さば母の死は真実となる
しやんと顔上ぐへ息の道ふさぎたまふな 黙々と大人
は綿詰め死者を作りつへ生と死を隔てる壁の薄きこと
母はひとりで抜けてしまへり…胸に迫る作品群であ
る。ネットで「大空の亀」を検索してそのほかの歌も是
非お読みいただきたい。

掲句は「亡き母とともに」と情を抑えた表現がなされ
ている。しかし作者の思いは深く静かに伝わってくる。
たとえばこれが「亡き母を思ひつつ雛飾りけり」であ
れば、この深みは出なかったであろう。短歌よりも更に短

い俳句は、述べないことで力が与えられる詩形だと考
える。俳句を作る私達は思いをこらえる決意と覚悟をも
たなくてはと思う。堪えることで俳句の詩空間はおお
く広がってゆくことと思う。

あたたかや膝にをさまる琵琶の形

矢野百合子

以前クラシックギターを弾いていた頃があった。ギタ
ーは膝に置くという感じである。琵琶はというと、確
かに「膝にをさまる」形である。へゆく春やおもたき琵琶の抱
ごころ 蕪村へに呼応するような作品である。

朧夜や廻り廊下の古硝子

大地 真理

廻り廊下という言葉が久し振りに味わった。光が歪
んで抜けるようなレトロな硝子であろう。具象の向うに向
田邦子が描くような光景が見えてくる。

クローバーのおかずから食べようか 今井 春生

花過のへりコプターが空壊す 田代 貞枝

青春の割れ目に吹ける石鹼玉 及川木栄子

眼かくしをされてうれしき遠花火 岸 千手

一句目はのびのびとした詠出が楽しい。二句目「空壊
す」によつてへりコプターのぼたぼたという騒がしい音
が聞こえてくる。石鹼玉が吹き入る「青春の割れ目」や、
花火の夜の目かくしなどいずれも瑞々しい。

空集

柴田佐知子選

探梅や寺の歴史の長々し

福岡

野畑小百合

宮太鼓合図にどつと豆撒けり

顔見知りめがけ撒きけり年男

春竜胆赤牛に道ゆづりけり

病室に神父の足音花大根

加護祈る人溢れけり花の寺

著莪の花説法の声谷を越え

少女らの声に埋もるる花御堂

ネクタイを結びつつゆく四日かな

福岡

吉村 撰しょうご護